『グレッグのダメ日記』

ジェフ・キニー作　中井はるの訳　ポプラ社　2008.5

他者に読ませるための日記

長谷川幸男

日記は、日々の出来事や感想などの個人的記録で、非公開なものと考えることができますがいかがでしょう。日録、記録、日誌と連想したところで意味はないと片づけられそうですが。しかし、日記は文学に昇華するものもあります。また、著名な科学者や政治家のそれは、前者であれば業績（発明のプロセス)、後者であれば歴史的考証の手がかりに有用だと、もてはやされるにちがいありません。さて、『グレッグの日記』は？

ママにせっつかれて、グレッグは日記を書くことになりますが（グレッグは「記録」といってはばかりませんが)、ママの意図はなんなのでしょう。「あなたも6年生になったのですから、毎日、自分を管理するために、そして、失敗や反省をのりこえて成長の足跡をたどり、将来の夢を育むため」との期待をこめたのでしょうか。

当のグレッグは、「ボクがしょうらい、金もちの有名人になったとき、1日中ばからしいしつもんに答えるのが、めんどうだからだ」と、記録する理由を明らかにします。これには読者である子どもは、目からうろことばかり共感するにちがいありません。それは、日記を書こうとする意志につながります。

9月、新学期、グレッグが6年生に進級した日から、日記がつづられるわけですが、席順への期待と不安と不満、異性への淡いまなざしが正直に、グレッグの本質を投影しながら書きとめられています。キャラクタライズされた登場人物のイラストを配しながら。

家族－両親、高校生の兄、保育園児の弟－のなかの出来事が、力関係や感性や状況の受けとめ方と判断によって右往左往する様子が書きつづられもします。そして、学校生活（行事）のさまざまな場面でのグレッグとクラスメイトとの葛藤をはちゃめちゃに、ときにはシリアスに書きつづってもいます。

なによりも、クラスメイトであり、近くに住むマイペースといえるロウリーとの日々をつづる場面が多いのは、作者の自然な営為といえます。作者の幼少年期の記憶にある大切なともだちだったからでしょう。また、ぼくの当て推量かも知れませんが。

ともかく軽妙ではあるが、軽薄、狡猾なグレッグの事件にまき込まれながらも、知らん

顔をみせながらひょいと身をかわす自然体の、ロウリーのなんともいえないかわいさに喝采したくなります。

グレッグの日記は、さすがに毎日ではありませんが、6 年生が終了するまでの十ヶ月間書き続けたことになります。日記は気が向いたときに書けばよいもので、「○時に起きて、トイレに行って、学校に行った」はもっての他ですね。

グレッグが毎日たのしく過ごしたことが伝わって、なおかつ、個性が表出して観察できれば、他者に読ませるための日記を書いた証しになります。作者は満足感にひたって、ほくそえんでいるのではないでしょうか。

アメリカの子どもたちの文化・伝統・習慣をとりこんだ日常が、日本の子どもたちにどのように受け入れられるか気になりますが、この作品がアメリカでは人気とのこと。アメリカのいまの子どもの典型を見るからでしょうか。

はたして、作者はオンラインゲームの開発者・デザイナーということですが、マンガチックなイラストを多用することで視覚的にもドタバタを増幅させながら、今はやりのブログ感覚がもてはやされている理由の一つであるとするなら、納得もできます。

めちゃ面白いとまではいきませんが、グレッグの日常が絵と遊びながら楽しめる作品ではあります。

（『子どもの本棚』2008 年 11 月号より転載）